

## 「鹿児島戦争の記憶」を求めて

「鹿児島の近現代」教育研究センター 特任助教 中嶋 晋平

初めて鹿児島で生活するようになってから4か月がたった。「鹿児島の近現代」教育研究センターで仕事をする以上、専門とする近代日本の軍隊やアジア太平洋戦争と絡めた研究を始めようと、ネタ探しをしていた。

様々なキーワードでネット検索を繰り返すうち、ある記事が目にとまった。それは毎日新聞の2019年9月6日付の地方版に掲載された「進駐軍上陸を語り継ぐ会 機銃掃射、恐怖生々しく「記憶つたえなければ」鹿屋／鹿児島」という記事だった。終戦間もない1945年9月4日、アメリカ軍が鹿児島県鹿屋市高須町の金浜海岸に上陸したという史実を語り継ぐ住民の会の活動が記載されており、そこでは終戦直前のアメリカ軍機による機銃掃射やその後のアメリカ軍上陸の様子など、終戦前後の人々の体験が記述されていた。

南日本新聞のデータベースを検索し、高須町のアメリカ軍上陸に関する記事を探した。それによると、1999年から現在まで、地元の人々によって進駐軍の上陸を語り継ぐための会合が開かれてきたという。語り継ぐ目的は、主催する有志の会の名前の通り、アメリカ軍の上陸とその後の地域のあり方を人々に伝え、「戦争を風化させない」ためだ。

戦争の記憶が風化・失われていくことに対する危機感は、戦後50年の節目を迎えた90年代ごろから歴史学の分野においても課題として浮上し、大学や歴史系の資料館・博物館などがアカデミックな活動として、関連する史料の収集・保存・公開に努めてきた。もちろんそれまでにも、戦場体験、空襲体験、原爆体験など、様々な戦争体験が書籍や新聞・雑誌記事などの文字資料と

して、またそれらを題材にした映画やテレビドキュメンタリーなどの映像資料も、ビデオやDNDなどの形で戦争体験を次の世代に伝える役割を果たしてきた。また2000年代以降はデジタル技術の進歩に伴い、上記史料のほか、体験者の生の声や映像が蓄積され、それらをネットを介して知ることができるようになった。

こうした流れを受けてか、近年、戦後の近代歴史学が政治史を中心に提示してきた「近代日本の戦争の歴史」が相対化される形で、名もない普通の人々の多様な戦争体験に基づいた研究、各地域の戦争・軍隊に対する主体的な関わりを明らかにする研究が増えつつある。

高須町の郷土史家が復刊した『終戦秘話 昭和の陣痛—進駐軍高須金浜上陸の記録—』は、高須町にアメリカ軍が上陸する前後に書かれた個人の記録をもとにした回想録である。敗戦により情報が途絶し、アメリカ軍上陸を前に恐慌状態となった高須の町の様子、自ら目撃したアメリカ軍上陸の瞬間、アメリカ兵と地域住民との関わりなど、進駐軍と地域社会との関わりが詳細に綴られている。CiNii Booksにもヒットしない、この貴重な回想録の記述は1946年3月で終わっているが、その後もアメリカ軍と地域の人々との関わりは続いたはずである。

戦争の終わりとはいつか。その解釈は様々だが、少なくとも高須の人々にとって終戦後の進駐軍の上陸は、風化させるべきではない戦争の記憶として捉えられている。まずは鹿児島の普通の人たちの戦争体験の記録を集めよう。そう思い立ったのは4月末ごろだった。